

360°

フォトジャーナリスト

宇田有三



なった。当時、カメラの前に身を乗り出してふざけ回り、用もないのに何かと話しかけてきたのが嘘うそのよう。

写真の表面について汚れを、自分の服の袖で懸命にぬぐい、何度も写真を見入る。

「今、いくつになった？」

「二十歳」

彼はこの間、どんな暮らしをしてきたのだろうか。

正直、私はどこまで想像力を働かせたら、彼の境遇を理解することができるのだろうか。

写真の表面に雨粒が落ちてきた。いよいよ降ってきたか。

彼の写真を撮った十一年前もまた、雨期の始まりを告げる、分厚い雲がたれ込める五月だった。

中米グアテマラの首都グアテマラシティに入ったのは、五月十八日の午後。

## 五月の雨

彼と再会できる望みはそれほど持っていないかった。それでも、もしかしたら……そう思っ、彼の写った写真を持ってきた。

もっとも、彼と呼ぶには、ちょっと無理があるかもしれない。写真に写っているのは、十歳の男の子だからである。

久しぶりに訪れるグアテマラのゴミ捨て場。個人的

には、写真撮影がしにくい所だ。そこがゴミ捨て場だから、ということではない。

写真は撮っていて、ごぶごぶの石やゴミの中から拾ったリングを、背後からぶ

訪れた七カ国のゴミ捨て場で、グアテマラだけだった

だが、「写真を持ってきた。だが、」

「この子知っている？」

吸っているはず」

ちよつと驚きた。周りに人が集まってきた。

一枚の写真は、ゴミ拾いで汚れた手の中を渡り歩く。ラミネートされた写真

見つめ、恥ずかしそうには

できれば来たくなかつ

えっ、やっぱり居るのか。

にかむ。無口でおとなしく